

# 日本家族社会学会ニュースレター

No. 14 1995.6.6 編集・発行 日本家族社会学会事務局

〒260 千葉市中央区大蔵寺町200番地 淑徳大学社会学部内

TEL:043-265-7331 (代表) FAX:043-265-8310

Dept. of Sociology, Shukutoku Univ., 200, Daiganji-Cho, Chuo-Ku,  
Chiba-Shi, Chiba 260 JAPAN

郵便振替口座(International Postal Giro) 00160-7-564653

NEWSLETTER

## 主な内容

野々山久也「大震災と家族」	P 1
篠崎正美「アジア女性交流・研究フォーラムについて」	P 2
玉水俊哲「地域社会変動と住民の生活と意識の変化に関する研究」	P 3
北から南から	P 4
お知らせ	P 5
理事会・委員会報告	P 6
会員異動	P 10

## 大震災と家族

野々山 久也 (甲南大学)

5,500余名の生命を奪い去った、あの未曾有の阪神・淡路大震災いらい、はや4か月半が過ぎようとしています。私の勤務する甲南大学は、被害が最も甚大で死亡者の最も多かった神戸市東灘区にあるために本館と教室棟をふくめ大きな3つの棟が全壊しました。4月15日合同慰霊祭を終え、5月になってやっと新入生のオリエンテーションが行なわれ、グラウンドに建てた仮設教室で新学期の授業が開始されたところです。

建物については、いずれ建て替えれば元に戻ります。しかし失われた命は戻りません。甲南大学では16人の学生をはじめ多くの関係者を失いました。私の場合には無念にも応用社会学専攻博士課程の柳和樹君を失いました。彼はフランス語が良くでき、フーコーやブルデューの理論に精通し、将来の期待される大学院生でした。下宿先の近所のお風呂屋さんのエントツが倒れ、その下敷きになり、数時間後に救出されましたが、病院に運ばれても水やガスなどライフラインの寸断で手術もできず、臓器破裂という診断で他界してしまいました。「どうして彼が……」と、これを書いている今でも涙が滲んできます。

「災害と家族」というテーマは、かねてより家族社会学においては大きなテーマではありましたが、これまで私は真剣に取り組んできませんでした。しかし兵庫県家庭問題研究所(研究所の建物そのものも被害を受け、現在、復旧工事中)に所属していることもあって、1か月経ったところから今でなければ出来ないデータを収集しておかなければと考えるようになりました。すでに決算期に入ろうとしている研究所にはそのための余裕(予算)はありません。また行政やマスコミ関係者による連日のさまざまな調査のせ

いで「調査公害」という言葉まで生れているのに、家屋が焼失や倒壊してしまった被災者家族を対象に外から入ってきて一方的に調査することは人道的にも許されません。

しかし大都市での震災という大災害は、今後別の大都市地域でも起らないとも限りません。今回の大震災だけでなく次に備えるためにも今でなければ得られないデータを収集することは貴重であると考えました。幸いにして家庭問題研究所の協力も得られることになったので、応用社会学専攻の院生たちと相談して、東灘区や長田区、そして北淡町などいくつかの避難所（甲南大学も避難所になっていた）にボランティアとして出かけていって、いくつかの典型的事例をインタビューすることにしました。被災して後2か月後くらいまでの避難所生活をはじめとする被災家族の罹災体験のモノグラフをまとめました。ご希望の方は、誠にこころ苦しいのですが、郵送料と実費の880円分の切手を同封して下記までお申し込み下されば、郵送いたします。

なお家庭問題研究所では、本年度のテーマの1つに「災害が家族に及ぼす影響について」という調査研究を実施することになりました。学会員の中で、このテーマにかかわる論文や調査報告書がお有りでしたら、またそうした研究をご存じでしたら、ぜひお知らせください。図々しいお願いではありますが、できれば最終報告書の中に一覧表にして紹介させていただきたいと思っております。

〒650 神戸市中央区山手通4-16-3（県民会館8階）

（財）兵庫県家庭問題研究所 TEL:078-321-2730; FAX:078-322-3933

## アジア女性交流・研究フォーラムについて

篠崎正美（熊本学園大学）

竹下元首相時代の「ふるさと創生事業」の1億円をシードマネーとして、北九州市が1990年10月に設立、1993年に労働省認可の財団法人になりました。

アジアを中軸として、女性の視点、正確にはジェンダー関係の見直しと女性の地位向上という視点から、国際交流・国際協力とそのための調査研究を始めています。調査研究のラインは当初私だけが専任で、周辺の大学の先生方に委託研究をお願いし（「開発と女性」のテーマ）、それぞれ基礎的な研究と文献及び資料収集を行ってきました。ほかのラインは情報・交流などで、スタッフは市職員の派遣も含めて12名です。現在、研究員は2名に増員、頼もしくなりました。ソウル、バンコク、北京と経済開発のめざましいアジア諸国の首都圏で、当該国の大学や研究機関との共同研究という形で、既存研究のまとめと面接調査による実証研究を行い、今年はマレーシアでの共同研究に着手したところです。これに、南アジアの女子労働の研究が加わることになりました。年1回、研究誌『アジア女性研究』を発行（日本語・英語）。また、毎年秋に、アジア女性会議—北九州を開催、ジェンダー関係の視点からの生活・文化に関する自由発表を公募しています。旅費・宿泊費等をフォーラムが出しますので若い研究者の方々は試験的なアジアの研究を大いに発表しにきてください。

この他、JICAの委託による「アジアの女性行政官研修セミナー」で、毎年数か国からの参加による、教育・労働・環境・福祉などの女性の地位向上にかかわる行政課題についての研修コース、「環境・開発・女性」研修コースなどを研修課が担当。情報課では、情報誌「エイジアン・ブリーズ」の発行、ナショナル・マシーナリーに依頼した各国の女性に関する統計の翻訳（アジアの女性シリーズ）、図書文献の収集、小学生の国際理解教材としてのビデオ作成、海外通信員制度による草の根情報の収集。交流課では、市民むけのアジア・セミナーの開催、これを修了した人たちの中からそだってきた

国際協力NGOの支援・育成事業など。

しかし、仕事はかなり、ボーダーレスの側面も大きく、またアジアに限らず、地球規模でネットワークが構築されつつあることと、東京での一極集中でない国際化・民際化の一翼を女性の視点で担っているのが特徴といえます。主要な出版物は日本語と英語の両方で、(四苦八苦しながらですが)出版しています。

組織の外部の関心ある市民、専門家からささえられているのも大きな特色です。

## 地域社会変動と住民の生活と意識の変化に関する研究

### — 地方の生活から首都圏を見る —

玉水俊哲 (専修大学)

従来から、多くの地域変動と住民生活の変化に関する調査や研究は、地域社会の工業・産業開発による「地域変動」を前提として行なわれてきたといつてよいようにおもう。いわば自治体主導型の地域社会の活性化という「工業化」「都市化」と住民生活の変化の相関を見ようとするものであったと考えられる。

わたしたちの研究も、基本的には従来の地域調査の手法を下敷きにして行われてきたが、この研究では、住民の生活と意識の変化と対立に主要な視点がおかれてきた。

従来「白河」は、関東から東北への玄関口としての地理的条件を持ってきていたが、東北新幹線の開通と須賀川の福島空港の開設に伴って、主都圏に目を向けた「開発」が進んでいる。

新幹線「新白河駅」周辺を中心とする市街化の進展、東京から新幹線で約一時間という「首都圏通勤可能圏」としての宅地開発の進展、あるいは「東北自動車道」新白河インター利用のレジャー開発としてゴルフ場の開設などが進んでいる。

つまりこの白河地域の開発は、新幹線、空港、高速自動車道という交通手段の発達に負うところが大きいといえる。加えて、首都圏と比較して格段に安い地価が工場立地と宅地開発を促進しているであろう。当然ながらそれら「開発」の視点は、主要には首都圏に向けられている。

わたしたちは、各自治体の開発理念や開発計画をおさえながらも、住民の生活と生活意識の変化を、「旧住民」と「新住民」の対立と融合の様態がどのようなものであるかを軸にした調査を行っている。住民の生活と生活意識の変化の様態は、今後この地域の社会構造および生活構造の変化を見極める重要な鍵になると考えているからである。

多くの場合、「新住民」の生活様式と生活意識の様態が、当該地域の従来の生活と生活意識にインパクトを与え、旧来の生活と生活意識の変化の要因となっているが、この場合、「旧住民」の生活と意識の変化のベクトルと、「新住民」の生活と意識のベクトルは、平行線をたどるのか、またはいずれの時期にか交差してどちらかの生活と意識のあり方に融合して統合されるのかは、地域社会構造の変動を考える上で重要な視点であろうと考える。

2回の子備調査を含めて、1991年から6回の聴取り調査を行ってきたが、「開発計画」をめぐる各自治体の対応の違いとその背景、住民の購買行動の変化、家族や子育て意識の変化、地域の伝統的な「祭」とそれへの参加、「町内会」への参加なども含めて、地方の生活を視点にして「首都圏」からの「外来者」の生活が、どのように地方の生活を変えて行くのかという関心から、もう少し住民の生活と意識のディテールとその変化のベクトルを追っかけてみたいと考えている。

## 北から南から

このコーナーは、自分の研究、近況、関心をもっている問題等について気軽に書いていただくコーナーです。特に地域性を考慮して、なるべく多くの会員からの情報を紹介したいと考えています。事務局までふるって原稿をお寄せ下さい。

### 遠くの親戚、近くの他人

加藤喜久子（北海道情報大学）

都市高齢者の社会的ネットワークに関する研究（代表三谷鉄夫）のまとめに入っております。1992年に東京都武蔵野市、1994年に北海道札幌市で調査を行い、この3月に札幌調査の第1次の分析を終えたところです（『高齢者問題研究』11号）。これらの調査では、友人に焦点をあて、同じ枠組みで親しい親戚についても質問しています。友人と親戚とのつきあいかたの違いにふれてみますと、友人はサークル・宗教活動、あるいは趣味・スポーツなど、共通の関心や興味に基づく活動の相手として選択されています。他方、親戚は子供ほどではないにしても困った時助け合う相手として現れる傾向にあります。しかし、友人をさらに職場、学校、サークル、近所、その他に分けた場合、近所やその他の関係の友人では、病気の時の手助けや家の訪問の比率がより高くなっています。「遠くの親戚、近くの他人」があてはまることとなります。さて武蔵野はどうでしょうか。これから比較を行う予定です。

### 農家の住居

三谷鉄夫（北海道大学文学部）

昨年暮れから今年春にかけて、久しぶりに北海道内の農村巡りをした。歴史が浅いため伝統に拘束されず、自由な雰囲気ただよっている農家だが、水田・畑作・酪農による違いとともに共通の特徴をわずかみだ。

農業の主要な担い手は少なくとも高校以上の学歴をもつ、30代ないし40代の夫婦である。しかも、後継者がいるとは限らないのに、ほとんど、この2人の労働力で水田の場合10ヘクタールを耕作し、酪農の場合100頭以上の牛の搾乳を担当し、3000万の粗収入をえている。印象に残ったこととして、親との同居が依然として多いものの、実績を挙げている酪農家に妻の親との同居があること、隣の別棟に住む夫の両親との近居が若い夫婦たちに好まれていることを挙げることができる。このような生活分離と、10%台に落ちた伝統的な性別役割分業の支持率、都市の生活者と変わりがない結婚・離婚観とはなんらかの関連があるように思われた。

### 越中売薬の様変わり

永井広克（富山女子短期大学）

越中富山といえはすぐに売薬を思い浮べる人も多いことでしょうが、その売薬も様変わりを見せています。富山に家族を残して、何ヶ月も一人暮らしをしながら回商する伝統的な出張型が減りつつある反面、家族一緒に回商先に移り住み、そこで商売をする現地居住型が増えているのです。今は出張型の売薬さんは約3000人で、現地居住型の売薬さんは約1500人ですが、いずれ売薬さんの数も薬の売上も、現地居住型が出張型を上回る日が来ると思います。その現地居住型の売薬さんに対し、去年から郵送調査を行なっていますが、これまでわかったことは、意外と長男が多く、移住しようと言い出したのは本人であり、その理由の第1は家族と一緒に住みたいからというものでした。持ち家率が全国第1位ということからもわかるように、イエを大事にするのが富山の土地柄ですが、核家族化の波は富山にも押し寄せ、売薬にも影響を与えているようです。

沖縄は長寿の県として知られていますが、お年寄りの自殺率もまた日本で最も低い県です。特に女性については先進諸国の中でも最低と言えるレベルにあります。

こんなデータをゼミの学生たちと見ながら、「日本は高齢者の自殺率が高いのに沖縄はどうしてこんなに低いのでしょうか」「沖縄のお年寄りっていったいどんな暮らしをしているんでしょうね」「見に行けたらいいですね」「行きたい、行きましょう」と交わしたこんな単純な会話が実現し、1992年と93年の2回にわたって学生たちと戸別訪問の面接調査をしました。また、94年には比較対照群として東北でも調査を行ないました。

これらの調査を通じてわかったことは、沖縄のお年寄りが家族や親族のほか、近隣の若い人々とも緊密に結ばれ、存在感を示し、社会に強く統合されていることです。

その要因には沖縄の風土・歴史に根ざすものなどさまざまありますが、意外なこととして興味深かったのは、親族交際が双系的であること、県外への流出者が比較的少ないことでした。これらと根強い敬老精神が相俟って、他出した娘や息子が日頃から親をよく訪ね、励まし、介護にも協力しています。

沖縄の良さを学ぼうとしても、それは社会の構造的な問題ですからおいそれとはいきませんが、少なくとも「家」制度や伝統的役割分業の規範から早く解放されて、嫁にだけ重荷を負わせるのではなく、息子や娘がもっと親を支えることではできないのでしょうか。勿論、このことは公的福祉サービス充実の必要性を減免するものではありません。

また、子どもが老親をもっと訪ねられる地域に居住できるように、現在の大都市集中型の政治・経済活動から地方拠点型のそれにし、かつ人々が郷土に愛着をもつことができる文化を育てることの重要性を強く感じています。

## お知らせ

1. さきごろの阪神大震災から早くも4カ月たちました。被災された会員の方々はいかがお過ごしでしょうか。

さて、本誌の「理事会報告」に出ていますように、被災された会員に対して、会費1年分（1994年度分、ただし既納の場合は1995年度分）、および本年の第5回大会の懇親会費を免除することにより、お見舞の気持ちを表明することが決定しました。

つきましては、該当者を事務的に特定することが難しいため、本人の申告によって免除いたします。該当の会員は葉書で結構ですから事務局あてに申告して下さい。被災証明書等を添付する必要はありません。

2. なお、三陸はるか沖地震で被災された会員にも同一の取扱いをしますので、該当の方はお申し出下さい。

## 理事会報告

(紙面の都合上、簡略化してあります。詳細は事務局あてにご連絡下さい。)

## 編集委員会から

『家族社会学研究』第7号は、光吉利之奈良大学教授を中心に関西地区のスタッフが編集作業を進めてきました。5月末現在、英文要約をのぞいて原稿は全て印刷屋の手に渡っており、7月末には刊行される予定です。

この号では、「国際家族年と現代家族」と題する特集に加えて、投稿論文5本が掲載されます。投稿論文は初期の頃に比べほぼ倍増の8本あり、どれを不採用にするかで苦労いたしました。投稿論文の増加は、学会としての成熟度を表わすものであり、大変に喜ばしいことです。今後、投稿論文がますます増加していくことを願っております。

(袖井孝子)

## 研究活動委員会から

去る4月1日に開催された理事会において、家族文献資料データベース構築準備委員会および全国家族調査準備委員会を研究活動委員会のうちに設置することが承認されました。これまで数年にわたり2つの大きな研究計画を実施すべく種々努力を重ねてきましたが、2つの準備委員会の設置が承認されたことにより大きな夢の実現に向けて第一歩を踏み出すことができたのではないかと考えています。

早速、2つの準備委員会が組織されました。準備委員会では、研究計画の実施に向けての基本方針、組織・運営のあり方、研究資金の準備、また先行研究のレビューなど研究を具体化するための準備作業に取り組むつもりです。準備委員会は以下のような会員によって構成されています。

## 家族文献資料データベース構築準備委員会

望月嵩（委員長）、稲葉昭英、木下謙治、指田隆一、杉岡直人、袖井孝子、  
中間美砂子、二階堂ひさ子、西下彰俊、野々山久也、牧野カツコ、三谷鉄夫

## 全国家族調査準備委員会

天木志保美、石原邦雄、稲葉昭英、岩井紀子、大久保孝治、神原文子、木下栄二、  
嶋崎尚子、清水新二、長津美代子、西野理子、藤見純子、正岡寛司、松田苑子、  
渡辺秀樹、渡辺吉利

準備委員会での議事・作業、および研究活動はできるかぎり開かれた取り組み方を基本方針としています。会員の方々のご意見を委員会または委員にお寄せいただきたいと思っています。また、委員会あるいは関連の研究会の開催などの案内を学会ニュースレターを通じて、あるいは独自の方法（目下検討中）によってお知らせするつもりですので、有志の方は奮ってご参加下さいますようお願いいたします。

（正岡寛司）

## 選挙管理委員会から

1. 日本家族社会学会第2期理事選挙に際しては、事務局側に大きなミスがあり、第2区・3区・4区の有権者の方々には大変ご迷惑をおかけいたしました。この件につきまして、深くお詫び申し上げます。投票期日はこうした事情を考慮して6月10日（消印有効）まで延長することになりました。投票をお済みでない方は至急投票をお願いします。なお、すでに周知済みではありますが、第2区・3区・4区の有権者の方は、投票にあたっては必ず2度目に送付した投票用紙と返送用封筒（封筒表側に緑のラインが引いてあります）をお使い下さい。

2. 開票予定日は6月13日です。選挙管理委員により開票作業が行なわれます。地区ごとの理事当選者は、次期総会（9月13日、淑徳大学）で報告され、承認を経て正式に理事が決定されます。

## 第5回大会実行委員会から

1. 第5回家族社会学会大会は本年9月13日、14日の両日、淑徳大学（千葉県千葉市）にて行なわれます。大会参加費は一般会員4000円、学生会員3000円、懇親会費は一律4000円です。

2. 今回の第5回大会に際しては、大会参加費（一般会員4000円、学生会員3000円）の事前納入を受け付けます。事前に大会参加費を納入された方には、大会報告要旨集を大会前にお手もとに届くよう送付いたします。納入の方法は、同封の郵便振替用紙をお使い下さい。ただし、通信欄にかならず「大会参加費\*\*円」と明記して下さいようお願いいたします。

3. 大会の自由報告の申し込み受け付けは終了しました。個別報告は9件、テーマセッション報告3件です。このほか、研究活動委員会によるシンポジウム1件、大会実行委員会によるシンポジウム1件と第5回大会は盛り沢山の内容になりそうです。自主企画のテーマセッションについて、コーディネーターから寄せられたメッセージを下記に紹

介いたします。

### セッションテーマ「未婚期の長期化と親子関係」

コーディネーター 岩上真珠（明星大学）

人口学的現象としての晩婚化は、ライフコースの一時期において新たなライフスタイルの出現をもたらしており、それを宮本らは「脱青年期」と名付けた（1994）。本セッションでは、今日の「脱青年期」の意味と家族形成における位置づけをいくつかの視点から検討し、未婚期の親子関係分析を通じて、現代家族研究への新たな切り口と展望を示してみたい。本セッションは、4名の報告を予定している。

### セッションテーマ「日本の家族と地域性—その3：超高齢化社会に向けて」

コーディネーター 熊谷文枝（杏林大学）

本テーマセッションは、昨年および、一昨年のテーマセッション「日本の家族と地域性」の続編である。ここでは、主として超高齢化社会に向かう日本の家族構造および家族変動を地域性、過疎化を軸として分析する。換言すると、マクロの視点に基づき日本の家族の多様性を各々の地域社会に根ざす産業特性を中心とする社会構造との関連において分析するものである。更に、家族と地域性の分析をとうして、急速に進展する日本の高齢化社会への提言を各地域（都道府県および、市町村）レベルから試みるものである。これらにより、本テーマセッションは、今後の日本の家族研究の方向性および、視点を模索することを意図するものである。

（過去2回の大会では、全国データ、北海道、岩手、山形、滋賀、島根、高知、鹿児島、における家族構造の報告がなされた。本年度の大会では、更にその他の地域からの報告を予定している。）

報告予定者：(1)橋本和幸（金沢大学・石川県）、(2)黒須伸之（東京都立羽田高校・東京都島嶼社会—青ヶ島村）、(3)山本正和（椋山女学園大学・愛知県）および、(4)玉城隆雄（沖縄国際大学・沖縄県）の4報告者。

### セッションテーマ「国際結婚とその家族をめぐる諸問題」

コーディネーター 嘉本伊都子（総合研究大学院大学文化科学研究科）

日本は先進諸国の中で唯一、大量の外国人労働者に依存することなく高度経済成長を成し遂げた国である。しかし、1992年末、外国人登録者数の日本国総人口に占める割合が1%を越えた。新規入国外国人、あるいは不法就労外国人の動向はそのまま国際結婚の急増と多様化に直結している。21世紀、日本列島に暮らす家族は日本人同士によって構成されるのではなく、親族の中に様々な国籍を保有するメンバーを含むようになる可能性があると言えるのではないだろうか。

近年「外国人労働者問題」が社会学でも盛んに議論されるようになった。その中には「国際結婚」に言及するものも少なくない。しかしながら、そこでは統計的な数字と若干の現状報告にとどまっている。この問題に関する議論が日本の家族社会学においてなされてきたかという、管見によれば、本格的な分析は皆無に等しい。国際結婚による家族も同じ「家族」として研究するにはどうしたらいいのであろうか？

今回のテーマ・セッションの報告者はいずれも家族社会学の専門家ではなく、また共同で研究を進めてきた者の集まりでもない。「これでいいのだろうか？」と不安に感じつつも個々に試行錯誤を繰り返してきた研究成果の発表である。これを契機に、研究対象、研究分野、関連理論、用語などのアウトラインの統一を多少なりとも図ることができたらと考える。

報告者とフロアとの交流が盛んにできるようなテーマ・セッションづくりをめざしたい。家族社会学がご専門の方々、あるいは、また別のアプローチでこのテーマに接しておられるの方々からのご教示を切に望む。

## 事務局から

1. 現在、学会員名簿を作成中です。6月中には会員各位にお届けできると思います。
2. すでに周知済みですが、住所・所属機関の変更等があった場合には必ず葉書、ファックスにてご連絡下さい。会費の納入の際に振替用紙に変更等について記載される方がおられますが、事務処理上混乱が生じることがあります。ご協力をお願いいたします。

## 会員異動 (1995年6月1日現在) (50音順、以下同じ)











## 編集後記

・うっとうしい梅雨の季節を迎えました。第5回大会実行委員会を兼ねた学会事務局といたしましては、梅雨が明けると本格的な夏が訪れ、いよいよ9月の学会が迫ってくる、という思いになっております。忙しい大学の業務を抱えながら、失敗を重ねつつ、四苦八苦の奮闘を続けております。

充実した大会を迎えることができるように、これからはエンジンをフル稼働させ、ゴールに向かって走ろうと思っております。会員の皆様方の率直なご意見、ご希望をお待ちしております（染）。

・5月13日夜、前事務局委員のS氏からの電話で選挙の投票用紙にミスがあることを指摘されました。この瞬間、私は「金縛り」になってしまいました。こんな恐ろしい経験は大学院入試を寝過ごして以来です。会員各位にご迷惑をおかけし、本当に言葉ありません。金縛り状態から空中浮遊できるよう修業に励みます（稲）。